

# カトリック山形教会報

# かすみ

# 10

2020.10.25



カトリック山形教会

〒990-0039 山形市香澄町2丁目11-15 TEL.023-622-3574 FAX.622-3590  
ホームページ <http://www.catholic-yamagata.com/>



## 人生後半の霊的旅路

主任司祭 千原通明

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。  
(2コリント24章16節)

人生後半は下降線を辿るように見えますが、C.G.ユングという心理学者は「下降することによって上昇するという逆説を経験できる」と述べています。肉体的には衰えていくとしても、内的、霊的には成長し続けるのだと。

「自己実現」という言葉が以前流行ったことがありますが、これは、何か自分のやりたいことを実現するという意味ではありません。心理学者の河合隼雄は、日々生きること自体の過程(プロセス)が大切なのだと説いています。

明確な目標があってそれに到達するなんてものではなく、生きていることそのまが自己実現の過程であり、その過程にこそ意味があるのだ。従って、よそ目には「道草」に見えるかも知れないが、それが自己実現の過程になっている、と考えられる。  
(河合隼雄『おはなしおはなし』朝日文庫、1997年、p.28)

生きていること自体が、自己実現、すなわち自分が自

分になるための大切な過程なのです。さらに河合は続けます。

人間にとっての人生後半の課題は、自分なりのコスモロジーを完成させることである。コスモロジーとは、この世に存在するすべてを、自分もそこに入れこむことによって、ひとつの全体性をもったイメージへとつくりあげることである。世界を自分から切り離して対象化するのではなく、自分という存在との濃密な関係づけのなかで、全体性を把握しなくてはならないのである。(同上書p.56)

コスモロジーの完成とは、星と星との間に線を引いて星座となすように、自分自身と自分が出会い経験してきた事柄との間に関係性を見出し、全体として自分の星図を作り神話を紡いでいくことです。言い換えれば、出来事や経験の点と点をつないで自分の「物語」を作ることとも言えます。生きるとは自分の物語をつくること。主人公は自分です。

この旅路を、共に歩んでくださるのがイエスです。けっして一人ではありません。わたしたちの「内なる人」が日々新たにされるのは聖霊の働きによるものです。共にいてくださる神が、わたしたちの物語の見えない土台になっています。恐れずに歩んでまいりましょう。



トゥミル神父のラテン語による任命書の朗読



前教区長菊地功大司教の挨拶



司教団による受階者への授手



受階者の頭上に福音書が広げられる



全ての式典が終了し、記念撮影のために成井大司教を中心に並ばれた。



参列者皆さんに祝福をする成井新司教



カテドラル前で菊地大司教と成井新司教



モットー

いつも ふくいんを とともに

新潟教区の豊かな自然とそのいのちの恵みに謙虚にあずかりながら、イエスがもたらした良き知らせを多様な人々とともに喜びのうちに生き、分かち合い、広めていく。

紋章の説明

「聖書」は福音(良き知らせ)を、「色のちがう手」は多様な人々(人種、世代、性別、立場など)が交わりのうちに福音を生き、伝えていく姿勢を示す。「背景の青」には聖母マリアに取りなしを願う思いが込められている。「海よ山」、「魚と稲穂」は新潟、山形、秋田3県の豊かな自然といのちの恵みを表す。「魚」はイエス・キリストのシンボルであり、「稲穂」は信仰の豊かな実りと謙虚な生き方を表す。

# 第8代 新潟教区司教叙階式 教皇フランシスコにより任命 成井神父が新潟教区司教に

2020年9月22日、新潟教区に若く新しい司教が誕生した。(教皇フランシスコによって成井神父が新潟教区司教に任命されたのは、5月31日、聖霊降臨の主日。)

菊地功新潟教区前司教が東京大司教となられた2017年12月16日から新潟教区の司教空位期間は実に約2年半。しかし、待ち望んだ期間が長いだけに、パウロ成井大司教(46歳)誕生の喜びは大きなものとなった。

\*\*\*

新型コロナウイルスが未だ終息する兆しがみられないなか、新潟、秋田、山形ほか、各小教区から20数名の司祭と信徒代表という最小限の参列者約60名は、一席ごとに空けられた席で静かにその時を待った。

通常は教会管区の司教が所属司教を叙階することになっており、新潟教区は東京教会管区に所属しているため、東京大司教区の菊地功大司教が主司式司教の務めを行った。そして、古くからの習慣により、司教叙階の際には主司式司教は他に最低2名の司教を伴い、司教叙階を行う、これは司教の団体性を示すものと、司会者が説明された。

\*\*\*

入祭の歌「神よあなたのことばは」とともに、十字架を掲げたロレンソ神父を先頭に式の補佐を務める8名の司祭、各教区(札幌、仙台、さいたま、東京、横浜、名古屋、

京都、大阪、広島)の枢機卿、司教団が入堂、司教座のある祭壇上に菊地功大司教を中心に11人が並ばれた。

はじめに、駐日臨時教皇大使代理のモンセニョール・ヴェチェスラブ・トゥミル神父のラテン語による任命書の朗読と英語による挨拶が行われ、通訳は当教会の千原神父が務めた。続いて大瀧神父が日本語で任命書を読み上げられ、私たちは大きな拍手でその喜びを表した。

\*\*\*

菊地大司教の説教のあと、成井大司教被選司教の叙階式・着座式が古くからの伝統に従い厳粛に行われた。

受階者であるパウロ成井大司教はキリスト教会の望みに従い司教としての務めを果たしていく約束を表明する「叙階の約束」を行った後にひれ伏した。諸聖人の取り次ぎを願い連願を全員で唱え、司教団による受階者への授手(キリスト教で、手を人の頭に置いて、聖霊の力が与えられるように祈ること。)と叙階の祈りにより、聖霊の特別な恵みで司教に叙階され使徒の後継者となられた。

次に受階者の頭上に福音書が広げられ大司教の祈りが続き、新司教の頭に聖霊の特別な恵みの聖香油が注がれて、司教の権能の象徴である福音書、指輪、ミトラ(司教冠)、バクルス(羊飼いの杖に似せた司教杖)の順で授与され、新潟教区司教座に着座された。

着座後は成井司教が司式を執り行い、祝福でミサが終

了した。その後、新潟教区の新司教の誕生と着座を祝し、式典が行われた。はじめに菊地大司教の挨拶があり、「1時間くらい前まで、新潟教区の責任者を務めていました菊地と申します。先ほどクビになりました。」…と。同時にこれまでの16年間に感謝を表し大きな拍手が起こった。

\*\*\*

菊地大司教は挨拶の中で、次のように語られた。「コロナ過で集まることができないという状況の中でお祝いをするようになりました。でも、このコロナの状況の中で私たちはひとつのことに気が付いていると思います。

それは、教会は地上に目に見える形の教会と霊的なつながりの教会のふたつの側面があると、教会憲章にも書いてあります。まさしく今までは、目に見える形での「日曜日にどれだけたくさんの人が来るか」、「お祝いにどれだけたくさんの人が来るか」ばかりを考えていた訳ですけど、今こうやって実際に集まることが難しくなったなかで、霊的な絆、信仰のうちに霊的に結ばれているその絆は、いったい何なんだろうかと、このことを改めて考える。そういう時期、そういう機会を私たちは与えられていると感じています。そして、今日のお祝いもインターネットを通じて新潟教区の中だけではなく、多分、世界中のいろんなところで、今日のお祝いを一緒に見いただいている。それは、霊的な絆のうちに一致をしながら普遍教会の教会共

同体として皆がつながっているということを改めて考えさせてくれる新しい形での教会の第一歩となったような気がします。…と、これからの新しい教会のあるべき形を示してください。

\*\*\*

最後に成井新司教様から感謝の挨拶が述べられた。「今日は、感染症の関係で、参加がかなり制限された式となってしまいましたが、新潟教区の各地区を代表して参加し、共に祈りくださった皆さま、そして、参加できなくても様々な場でお祈りくださった信徒、修道者、司祭の皆さま、神言会と聖霊会の兄弟姉妹の皆さまに感謝申し上げます。世界中の人々が様々な形で感染症蔓延の影響を受け、不安な日々を過ごすなか、私たちは困難にある人たちと共に希望を持って歩んでいきたい。今日のこの司教叙階という神の恵みが、その希望のひとつのシンボルとなればと願っています。」そして、「私は教区司祭の皆さまの中で最も年下です。ですので、教区の皆さまには末の弟の司教ができたと思っただき、色々教えていただきながら、今日受けた重要な役割を果たしていきたいと願っています。」と、力強く語った。

最も若い成井司教様の叙階式に出席し、以前、菊地大司教様が「救い主は、小さくて弱いところに現れる。」とおっしゃっていたことを思い出した。(リポート・小林雅人)



## 導かれて

マリア・クララ 軽部 法子

この困難な時期に、4月19日洗礼式、5月31日堅信式を受けて頂いた事に、神父さま、信徒の方々、シスターには、大変感謝申し上げます。

私とカトリックの最初の出会いは、シスター渡辺和子の心のともしびという動画でした。

同居の母の事で、心身共に疲れ果てていた時のこの出会いは、私にとって衝撃的なものでした。それから引き込まれるように、毎日動画を観ては涙があふれてきました。シスター渡辺和子の声や話し方すべてにおいて私は癒されました。いつしか、この方の信じているものを私も信じて良いのではないかとと思うようになり、この山形教会へと導かれて来ました。初めて触れ合うキリスト教というものに対して理解するにはとても時間がかかりました。勉強会に参加し通信講座を受け、やっと洗礼を受けて頂ける準備が出来た時にコロナで延期という残念な知らせを受

け、ショックを受けました。私は洗礼を受けるべき人間ではないのかと、神さまがまだ早いとおっしゃっていただけるような気がして思い悩みました。そんな思いを、神父さまや代父母の中嶋さんが察して配慮してくださり、非公開ミサの中、洗礼を受けて頂きました。

それから1週間後の出来事です、夢の中で不思議な体験をしました。夢から覚めて、これは偶然とは思えませんでした。そしてすぐに確信しました。神がいつも光の中にあるように、私もこの光の中を歩もうと!

身体のすみずみや考えや感情の中に、そして魂の奥深くに永遠の命と復活を確信しつつ、生きていきます。

そして最後に、一日も早くこのコロナ感染症が終息をむかえますように、祈り続けます。

## 編集後記

広報部K.S

今年の1月17日は、阪神淡路大震災から25年目を迎え、2月には横浜港に入港したクルーズ船内でコロナウイルスの集団感染が発生し、コロナウイルスの恐怖が広がり、その後世界中で感染拡大し、日本も例外ではありませんでした。そして3月11日は東日本大震災から9年となりました。今年ほど危機管理という言葉が身に沁みることがありません。

現在もコロナウイルス感染症対応は収束されていない状況で先が見えません。しかし、身体の防御が心の防御とならないように、コロナウイルス感染の終息を祈り続けます。

